

予習確認プリント

学年：_____ 学籍番号：_____ 名前：_____

・熱移動の 3 つの基本形態の名称を答えて下さい。

①

②

③

・熱移動の 3 つの基本形態の内容をそれぞれ詳しく説明して下さい。

①

②

③

※予習の段階に比べて、授業を聞き終わった段階では、何がわかりましたか？

0. 講義の予定 (変更)

平成 28 年熊本地震による休講, スケジュールの変更の影響により, 以下のように日程を変更します。

04 月 12 日 (火) 第 1 回目 ガイダンス

授業再開

05 月 10 日 (火) 第 2 回目 熱の移動/熱が伝わるしくみ/熱伝達/熱伝導 (教科書 pp. 36～41)

05 月 17 日 (火) 第 3 回目 熱貫流量 (教科書 pp. 42～43)

05 月 24 日 (火) 第 4 回目 室温の変動/室内外への熱の出入り (教科書 pp. 44～47)

05 月 31 日 (火) 第 5 回目 断熱性能 (教科書 pp. 48～51)

06 月 07 日 (火) 第 6 回目 第 2～5 回目までの内容に関するまとめ

06 月 14 日 (火) 第 7 回目 湿度/結露 (教科書 pp. 52～60)

06 月 21 日 (火) 第 8 回目 環境と人体の熱平衡 (教科書 pp. 61～64)

06 月 28 日 (火) 第 9 回目 温熱環境指標 (教科書 pp. 64～68)

※「第 7～9 回目までの内容に関するまとめ」を実施する回を確保できませんので, 各自で教科書の練習問題 (pp. 84～85 の「湿度 (空気線図)」, 「結露」, 「体感温度」) を解いて, 該当する回の授業の内容を確認して下さい。

07 月 05 日 (火) 第 10 回目 日照の必要性/太陽位置/日照 (教科書 pp. 69～72)

07 月 12 日 (火) 第 11 回目 日影 (教科書 pp. 72～75)

07 月 19 日 (火) 第 12 回目 (熱エネルギーとしての) 日射 (教科書 pp. 76～78)

07 月 26 日 (火) 第 13 回目 日射の調節と利用/日射の取得と遮へい/ガラスに対する日射の透過率 (教科書 pp. 78～82)

※「第 10～13 回目までの内容に関するまとめ」を実施する回を確保できませんので, 各自で教科書の練習問題 (p. 86 の「太陽と日射 (日照と日射)」) を解いて, 該当する回の授業の内容を確認して下さい。

08 月 02 日 (火) 定期試験 (予定)

- 1 温度と熱移動 (教科書 pp. 36~43)
- 2 熱が伝わるしくみ (教科書 p. 36)

熱の伝わり方の概念と原理のまとめ

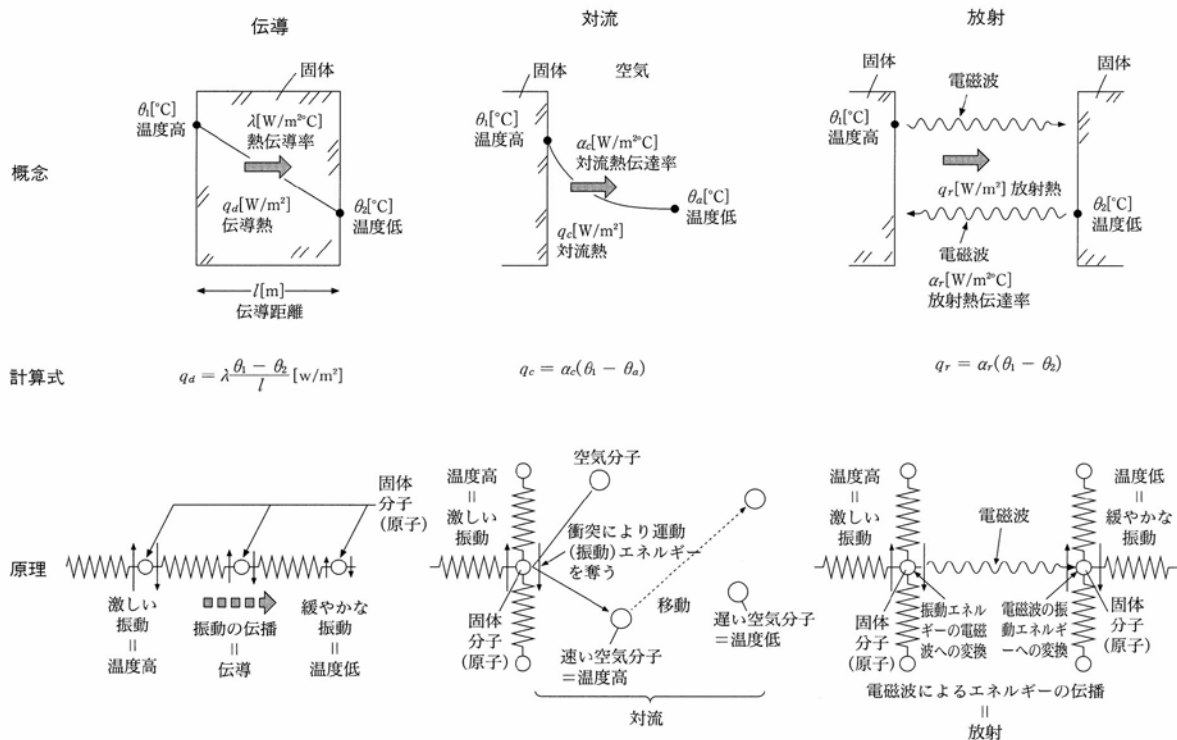


図 熱の伝わり方の概念と原理のまとめ (出典：参考文献 [1], p. 70)

注) 教科書などによって、用語に若干の違いがある。できれば自分で調べて理解を深めて欲しい。
→自分なりに、「熱の伝わり方」のイメージを捉えておこう

3 熱伝達 (教科書 pp. 37~38)

「3-2 放射熱伝達」(教科書 p. 38) の補足 (出典: 参考文献 [2])

射入した放射を完全に吸収する理想的な物体を完全黒体と言う。完全黒体の単位面積から発散する放射量 E_b [W/m^2] は,

$$E_b = \sigma \cdot T^4 \quad \langle 1 \rangle$$

である。これを、シュテファン-ボルツマン (Stefan-Boltzmann) の法則と呼び、 σ を完全黒体の放射定数またはシュテファン-ボルツマンの定数という。 $\sigma = 5.67 \times 10^{-8}$ [$\text{W}/\text{m} \cdot \text{K}^4$] である。

この時、2面 (面 1, 2 とする) 間の放射熱伝達は,

$$\sigma \cdot (T_2^4 - T_1^4) \quad \langle 2 \rangle$$

の形で表される。

これは,

$$\sigma \cdot (T_2^4 - T_1^4) = x \cdot (\theta_2 - \theta_1) \cdot \left\{ 1 + \left(\frac{\theta_2 - \theta_1}{2T_m} \right)^2 \right\} \quad \langle 3 \rangle$$

$$x = 0.2 \times 10^{-6} \cdot T_m^3$$

と書ける。

ただし,

$$T_m = \frac{T_1 + T_2}{2} \quad \langle 4 \rangle$$

$$\theta_1, \theta_2 : \text{面 1, 2 の温度 } [^\circ\text{C}] \quad (T = 273.15 + \theta)$$

この時、 $\left(\frac{\theta_2 - \theta_1}{2T_m} \right)^2$ が、1 に対して十分小さいと,

$$\sigma \cdot (T_2^4 - T_1^4) \cong x \cdot (\theta_2 - \theta_1) \quad \langle 5 \rangle$$

と温度差に対して線形化できる (近似できる)。平均温度 T_m が常温の 300K 程度、温度差 $\theta_2 - \theta_1$ が 50°C 以下であれば誤差は 1% 以下である。 x の値は常温で 4.0~5.5 程度の値となる。

4 熱伝導 (教科書 pp. 39~41)

「熱伝導率」(教科書 pp. 39~40) の補足

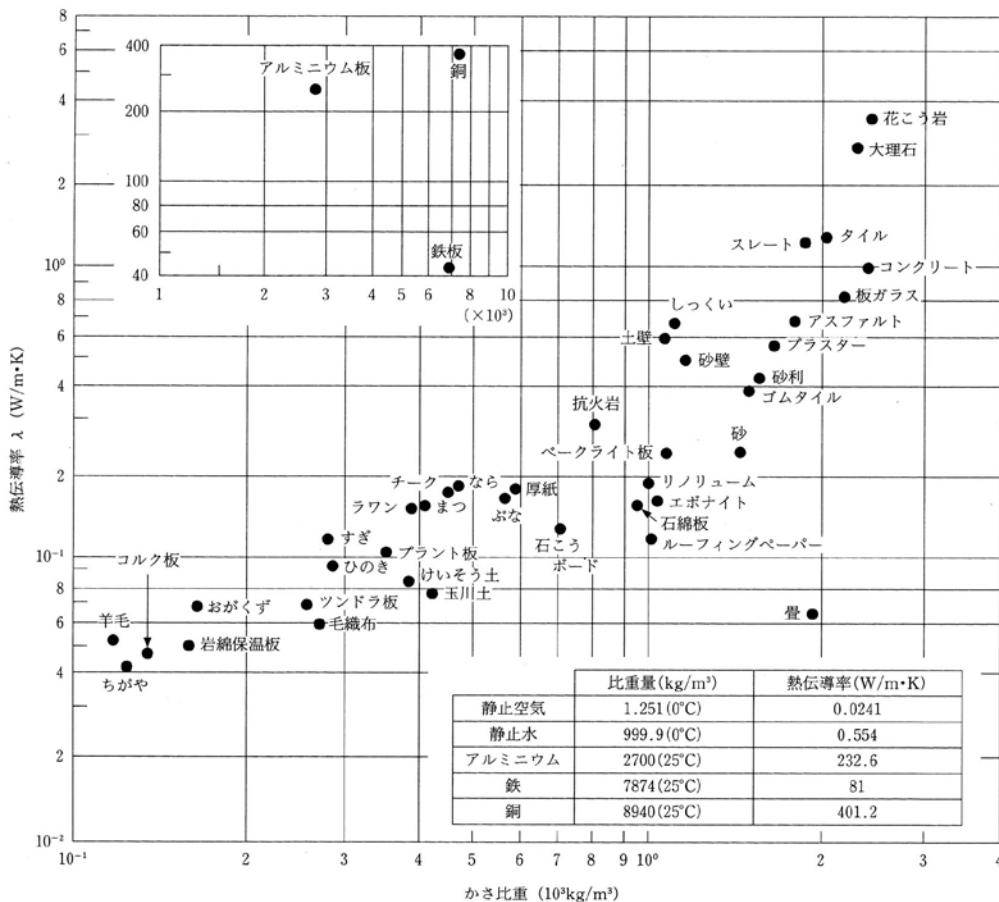


図 代表的建材の熱伝導率 (出典：参考文献 [3], p.42)

→熱伝導率と(かさ)比重の関係を理解しよう

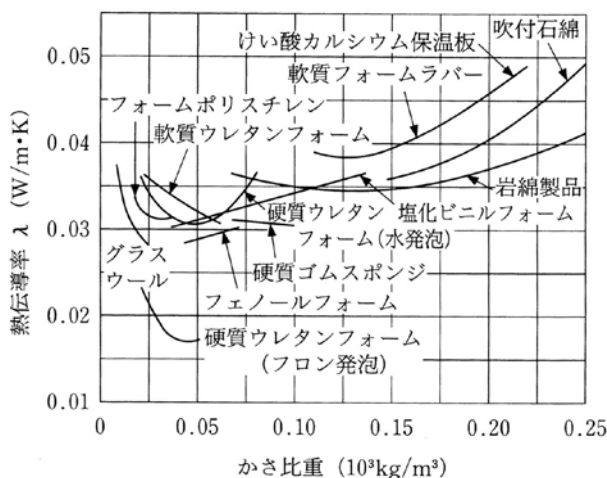


図 代表的建材の熱伝導率 (出典：参考文献 [3], p.43)

→かさ比重の値が小さい範囲に注目して、熱伝導率との関係を理解しよう

【参考文献】(順に, タイトル, 編著者名, 出版社, 発行年月, 価格, ISBN。〔〕内は熊本県立大学学術情報メディアセンター図書館所蔵情報)。

- [1] 『図説テキスト 建築環境工学』(加藤信介・土田義郎・大岡龍三, 彰国社, 2002年11月, ¥2,400+税, ISBN: 4-395-22127-0) [和書(2F), 525.1||Ka 86, 0000310578]
→第2版あり(2008年11月, ISBN: 978-4-395-22128-8) [和書(2F), 525.1||Ka 86, 0000320417]
- [2] 『エース建築工学シリーズ エース建築環境工学 II-熱・湿気・換気-』(鉦井修一・池田徹郎・新田勝通, 朝倉書店, 2002年3月, ¥3,800+税, ISBN: 4-254-26863-7) [和書(2F), 525.1||H 82, 0000263289]
- [3] 『環境工学教科書 第二版』(環境工学教科書研究会編著, 彰国社, 2000年8月, ¥3,500+税, ISBN: 4-395-00516-0) [和書(2F), 525.1||Ka 86, 0000275620, 0000308034]

学年：_____ 学籍番号：_____ 名前：_____

外気温度を θ_o [°C]，建物の屋外側表面温度を θ_{so} [°C] とする時，屋外側の放射熱伝達率 α_{or} [W/m²·K] は，下記のように表すことができる。

$$\alpha_{or} = \varepsilon_1 \cdot \varepsilon_0 \cdot c_b \cdot \left[\frac{\left(\frac{\theta_{so} + 273.15}{100} \right)^4 - \left(\frac{\theta_o + 273.15}{100} \right)^4}{\theta_{so} - \theta_o} \right]$$

ただし， ε_0 ：屋外側の放射率 [N. D.] (=1.0)， ε_1 ：建物の屋外側表面の放射率 [N. D.] (=0.9)，
 c_b ：黒体の放射定数 [W/m²·K⁴] (=5.67)

また，屋外の風速を v [m/s] ($v \leq 5$ m/s) とする時，屋外側の対流熱伝達率 α_{oc} [W/m²·K] は，強制対流とみなし，ユルゲスの実験式によると，下記のように表すことができる。

$$\alpha_{oc} = 5.8 + 3.9 \cdot v$$

- 1) 外気温度が 10°C，建物の屋外側表面温度が 20°C の時，屋外側の放射熱伝達率を求めよ。
- 2) 屋外の風速が 3m/s の時，屋外側の対流熱伝達率を求めよ。
- 3) この時の総合熱伝達率を求めよ。